小松神社の村祭り

C： 9月12日　【神水（潮）取り祭り】（しおとりまつり/方言：しおといまつい）

別名　【潮取り祭り】のことを【天狗さん祭り】【十二日お籠り】とも言う

《小松社の潮取り祭り》（小松社：祭神＝平重盛）

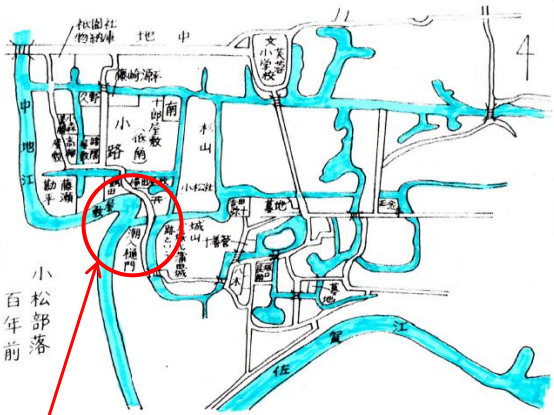
佐賀江川・中地江川（江湖：えご）の水（有明海から上がってくる潮【アオ[淡水]】）の恩恵に感謝する祭り。

（現在では【潮取り祭り】と【平家祭り】を総称して【小松社の秋祭り】と呼んでいる。）

【神水（潮）取り祭り】（しおとりまつり）は城原川や佐賀江川・中地江川流域の農業集落の氏神社や潮入樋門（井樋：イビとも言う[水門の出口・取水口]）で、毎年9月12日に行われ、天狗と御幣に先導されて、有明海から上がってくる潮をいただく行事です。
潮【アオ（淡水）】を農業用水として使用している集落が水の恩恵に感謝する祭りです。
潮をいただく（潮を汲んで、又は笹竹で潮の滴をいただく）ことから【神水（潮）取り祭り】（方言：しおといまつい）と言われています。
式典に向かうときは赤・青天狗と御幣に先導され、また斎場においてはお祀りすることから【天狗さん祭り】（方言：てんぐさんまつい）などとも呼ばれています。
また以前、御幣は部落の住戸分が飾られ、式典の時には御幣を立てて【神水（潮）取り】（しおとり）をおこない、それぞれの御幣は各家々に持ち帰り竈（かまど/方言：ヘッチイさん）に祀ったと言われる。
蓮池町は城原川や佐賀江川・中地江川（江湖：えご）が流れ、江湖（えご）を中心に縦横に堀が掘り巡らせています。
蓮池・千代田地区では堀が古くから水源地の役割を果たし、河川に水が流れ込む時期に堀に水をため、上げ潮のアオ（淡水）を含めて農業用水にしていました。
主産業は農業ですから、水に対する思い入れは強く、それが信仰や祭りにも現れています。
佐賀平野の中に流れるこの水路（堀）のことをクリークとよばれ、地域の農業を支える大切な役割を果たしています。
一番大きな役割は、なんといっても稲をを育てるための水の確保です。平野を流れる河川だけでは農業用水としての水の量が足りないため、雨が多い時期に余った水をクリークに貯め込んで、雨の少ない時期に使います。
もうひとつの大きな役割は、洪水の時に、農地や集落が浸かってしまわないように、あふれる水を溜め込むことでした。
こうして、安定した農業を営むため、江湖（えご）を中心に縦横に掘り進められ、結び合わせたのがクリークです。
また、干満の差が大きい有明海の特徴と水と海水の比重の違いをうまく利用し、水のみを取り込みクリークへと引き込むという淡水（アオ）取水も用いられました。
水不足を解消するために行われていた淡水（アオ）取水ですが、有明海が満ちる間のわずかな時間だけしか淡水を取り込むことができませんでした。また、淡水と海水が流れる江湖（えご）の水をなめることで判断し、潮入樋門を動かしていました。
しかし、当時としては潮（アオ・淡水）の恩恵を受けていたことは間違いありません。過去の知恵から江湖（えご）、クリーク、河川、そしてため池をつなぎ合わせ、平野に水が広くいきわたるように水の流れの仕組みが作り上げられ、佐賀平野の農業も栄えていきます。
小松社の南側にも江湖（えご）から堀へ【潮取り】（しおとり）ができるように潮入樋門が造られていました。

また、この【潮取り祭り】の日には【お籠り】が行われていました。
【お籠り】は立春から数えて二百十日めにあたる9月1日ごろが台風が来襲する時期であり、収穫を前に台風が来ないことを念じ、豊作祈願をするものです。
城原川や佐賀江川・中地江川流域の農業集落では9月12日の水へのお礼の祭りである【潮取り祭り】の日に、災害（台風）除けと豊作祈願である【お籠り】が行われるところが多いようです。昔は、集落の各家族単位で手弁当（重箱）を持参し、小松神社境内でむしろを広げて夕食（お御馳走）を楽しみました。
家長は神社の拝殿にて神事後の直来（なおらい）に参加し、マイ盃と手弁当持参でお神酒を頂きました。昔は、滅多にお酒を頂く機会があったはずはありません。
地区住民が晴れてお酒を口にできる機会であったことは言うまででもありません。
現在も直来（なおらい）は存続しています。

赤・青2面の天狗さんが引率することから【天狗さん祭り】とも言う。



中世の環壕集落を思わせる小松のクリーク（濠）群

小松社南の潮入樋門跡